

おせっかいの輪をひろげたい

岡山県早島町・早島小3年 平松 夢



「おせっかい」という言葉が気になったので、かわいい赤ちゃんが笑っているこの記事をお母さんといっしょに読んで、いっしょにかいて笑って見ました。すると、みんなが笑顔になれるおせっかいが私のまわりにもたくさんあることに気がつきました。

たとえば学校に行く時、私が一人で歩いていると「いっしょに行こう」と声をかけてくれる高学年のお姉ちゃん。三才の妹と

外で遊んでいけば「気をつけて遊びなさいよ。何かあったらすぐ言いおいで」といっしょに声をかけて見守ってくれる近所の人。私はたくさん人のやさしいおせっかいに守られて、安心して毎日笑顔で過ごせているとわかりました。

私は「一人じゃないよ。力になるよ」と私のおせっかいでだれかにエールをとどけたいと考えました。そのことを家族に相談したら、里親制度を使って、もうすぐ赤ち

若い母親が遠方に暮れている。服やゴミ袋が散らばる荒れた部屋で、むすかる赤ちゃんも2人きり。孤独な育児に疲れ果てていた時、チャイムが鳴った。扉を開けると、「近所さん、

絵菜の入った容器を手に「きょううさん作ってしもうたんよ。どうぞ」とほほえむ。泣き顔だった母親も自然と笑みをこぼした。

「岡山おせっかいプロジェクト」と題したショートフィルムの一場面。一般社団法人・ぐるーん（岡山市）が企画し、11月から動画投稿サイト「ユーチューブ」で公開している。

ぐるーんは乳児院や児童養護施設の子どもの支援、里親制度の普及に取り組んでいる。河本美津子代表理事(63)は長年の活動の中で、虐待や貧困など子どもが困難な境遇に置かれる背景には「親の孤立」があると感じ

子育てに「おせっかい」

あかり



ぐるーんが公開しているショートフィルムの一場面

日常の中にある孤立だ。病院の待合室で子どもが泣きやまず、冷やかな視線に押しつぶされそうな母親。夜の公園のベンチに座り込んでいるランドセルの男の子……。近くにいる「誰かが」気が付き、声を掛ける。そんなちょっとしたおせっかいが「ひとりじゃない」というエールになる――と伝える。

「『うつうつしい』と思われながらもいけない。それでも一歩踏み出してほしい」と河本さん。プロジェクトには岡山市内で活動する子育て家庭や女性支援の市民団体、子ども食堂なども賛同する。新型コロナウイルスが孤立を深めようとする時代に公開された作品は、こう締めくくっている。

「社会全体で子どもを育てる。それはひとりひとりがおせっかいを当たり前にしていく（河本さんらが見聞きたとなのかも）」（岡村綾乃）

やんが新しい家族になる人をしようかいしてくれました。私はこの赤ちゃんのために何ができるかなと考えた時に、私が赤ちゃんの時に使っていた服やベビーカーをあげようと思いました。でも古い物をあげてもいいわかもいいし、いやな気持ちになつたらどうしよう不安になりましたが、私は新しい赤ちゃんの笑顔のために、きれいにそうじや洗たくをして気持ちよく使ってもらえるようにしてわたししました。すると「ありがとう。大切に使うね」と喜んでくれたので、とてもうれしかったです。

私は小さくてもやさしいおせっかいを続けていけば、みんなが笑顔で過ごせるようになります。前に読んだ新聞に、「体の健康と同じくらい心の健康は重要」だと書かれていたので、みんながおたがいのことを思いやって心温まるおせっかいをすれば、きっと日本だけじゃなくて世界中の大人も子どもも幸せな気持ちになって、心も元気になるはずなんです。私は人を幸せにできるおせっかいの輪をひろげるために、これからもできることを見つけて、すすんで行動していきたいと思っています。

寸評

自分でもできる「おせっかい」は

何かを考え、実際に行動に移しています。これからおせっかいを続け「みんなを笑顔にしたい」という優しい気持ちを素直に表現しています。